ジョン・ガワー作
「恋人の告白」（その一）

大　槻　博　訳

第一巻

序

[1]私達より以前の人々が書いた本は残っております。ですから，私達はその当時書かれたものによって学ぶことができます。私もまた今日ここで，新らしいことがらについて，昔の賢者の例に倣って書き記しますので，私が他界した時，これは将来人々の目に入ることになるでしょう。このことは良いことです。[13]しかし，人々が語っており，また事実そうなのですが，もし知識となることについてのみ書きますと，読む人の心をいつも厭きさせることになります。ですから，読者がお許し下さるなら，私は中道を行き，ある程度楽しいこととまじめなこと，その両者の中間となる本を書きたいと思います。そうすれば，多少とも私の書いたことを好む人がいるかもしれません。私達が話している英語で書く人はほとんどいませんので，私は英国のためにリチャード王の御世16年に，本を著すことにしました。[26]今後何が起こるかわかりません。といいますのは，今この時この世は至る所いろいろと変化しております。今の世の中を過去と比較してみますと，殆どすっかり変っていることに気がつきます。[32]世の中がこのように変化している理由は，詳しく言う必要はありません。世の中の事情は目にふれますので，すべての人はそれを知ることができます。昔は書物が今以上に大切にされました。そして，書物は徳のある人々によって好まれました。今，私達のいるこの地上で起っていることがらを書く人がもしいなければ，人々が語っているような，良き人々の名誉は大部分忘れ去られるでしょう。かつていた立派な王を誉め称えるために，書物は至る所で人々にその王の行動を語っています。そして又，王位に就いていた時，極悪非道な行動をとり，悪事を重ねた王がいますが，そのような王の行動を書き記した書物もあります。[52]私には僅かな学問しかありませんが，ずっと以前に起った事柄について本を著わそうと思います。しかし，人々が語っているように，この世は今は零落れ，以前より悪い状況にありますので，出来る限り，毎日変化するこの世のことにもふれたいと思います。[61]私は今も，そして今までも長い間病いに冒されてきましたが，賢明な人々に理解されるように書き記し，私の務めを果したいと思います。[66]この序にはまじめなことがらを書いていますので，この序を読まれる賢明な人は誰でも，神以外は誰も知るこ

とのできないこの 世に起った 思いがけないできごとを 思い出して 頂けることでしょう。
72
序を書き終えた後，この本には，多くの不思議なことを行い，多くの賢明な人々を悲しませてきた愛について書こうと思います。77そして，私は現在支配している人々の美徳と悪徳について論じようと思います。しかし，私の知恵はすべての人々の欠点を直すほど深くありません。それらが王の命令により改められますように，心の通いあうランカスターのヘンリーという私の主君に，この本を送ります。88天上の神は，彼が騎士たるべき資格を備え，彼にはあらゆる徳があることを示されております。それゆえ，私は王に全幅の信頼をよせ，信念をもってこの仕務を果そうと思います。私のこの試みが成し遂げられますよう神に祈ります。

93
私は過去のことを心に思いおこしますと，その当時この世は豊かでした。当時人々の生活は平安でした。物は豊富にあり，人々は裕福で，武勇を示す機会がありました。騎士道は重んじられ，その評判は年代記に記され残っております。当時，法の正義は保たれ，王の特権は守られ，爵位は高く称えられておりました。106町には争いはなく，人々は国の法律に従い，正義を伴なった平和と愛がありました。人々の心はその表情に現われ，ことばは偽りの姿をとることなく，その心をあらわし，愛を妬む者はなく，美徳は崇められ，悪徳は蔑まれました。118今や作物は根の下になり，世界はまったく変りました。特に，愛はその本来の姿をなくしております。122私はその証拠として，嘘を言うことがない民衆の声を書き記しておきます。国は分裂し，愛ではなく憎しみが先を行き，戦いの後に平和が来ることなく，法は二つの顔を持ち，正義は徳と共になくなったと，一度ならず幾度も今日人々は語っております。このように四方を見ますと，世界を襲っている救いのない悲しみを人々は見るのです。136どの国も例外ではありません。といいますのは，どこにでも盲目の運命が廻す車輪の回転があります。このような理由ですので，誰にも確実なことはわかりません。神はなすべきことは御存知ですが，月の下に住む私達はこの世で苦痛に満ちた生活をしています。もし，この世を支配する力を持つ者が，至る所にある良き意見を聞き，正義を行うなら，国を不幸から救う唯一のものである愛を憎しみが打ち砕くことはないでしょう。
151
理性があれば，支配者である者に人々は従い，彼は人々の忠節を得ます。彼は人々の考えを受け入れるべきです。といいますのは，賢明な意見は聞くべきです。一人でも賢明ですが，十二人ではもっと良い知恵があります。159もし，王と臣下が一つとなりますと，毎日新らしく起っている戦争を終らせるため，神がその恩寵を下さるという望みがやがて生じます。164戦争は，特に人々に平和をもたらすために命を投げ出されたキリストを思うと，悲しむべきものです。しかし人々が語るには，愛はこの世から去り，平和は今日生きている人々にはありません。172戦争の原因をあらゆる点から考えるべきですけれど，世の中の人々のことばから戦いの理由を探し求めたい人には，戦争は不思議なものとなります。戦争をするどちらの国が悪いのか誰にもわかりません。といいますのは，すべての国が思い違いを

し，戦争の原因について責任があります。しかし，誰もそのことには気がつきません。すべてのものを守り，この世の人々の秘密を御存知でおられる神が，人々がひたすら誠実に訴えていることを聞き，もう一度私達に愛を与えて下さることを祈ります。この世のすべてのものの王である神が，国々の間に平和をもたらし，戦争の原因を取り除き，そして世界が平和になり，神もまた喜こばれますように。

193 現在の聖職者たちの生活を考えるために，過去のことを考えてごらんなさい。彼らは知恵と徳を求める人々の例であり，手本であったと言われております。198 まず第一に，彼らは自分達が説いていることから考えて，自分達の立場に反するような世俗的なことには心を傾けないよう，又，シモンが金を手に入れたそのような悪い行いを自分達は避けられるようにと神に祈りました。206 その当時，金融を行う者は聖職の売買の仲立ちをしたり，それが重荷となっている者も，そうでない者もいますが，受禄聖職者や高僧のために昇進の書類を送ったりして，お金を得ることはしませんでした。212 その当時教会は軍隊や盗賊の動きまわるさなか，戦争の結果に何ら左右されることはありませんでした。戦ったり，争うことは聖職者にとって立派なことではありませんでした。彼らは簡素で，忍耐強いことを望んでいました。世俗的な習慣が重じられる宮廷は，彼らが関心のもつものではありませんでした。名誉を求める虚栄心，それは火がつくと傲慢になるのですが，そのような虚栄心はなく，彼らはつつましく，傲慢を悪と思っておりました。224 聖なる教会は貧しい人々に施し物を与え，善行を行いました。聖職者の言動は潔白であり，人々はそれを手本にしていました。彼らの喜びは聖書を読むことであり，説教をし，祈り，真理を知らない人々に正しい道を教えることでした。234 ペテロの船は，(1) その当時の聖職者によって舵がとられ，人々の耳に，キリストの教えと徳のあることばが，有徳，謹直，貞節，寛大，知識をそなえた人により伝えられました。240 しかし現在は事情が変っております。聖職売買が行なわれ，世界は剣を手にしております。キリストは自ら平和を命じられ，キリストの教えは聖書に記されておりますが，不思議なことに，今や聖なる教会は自分達の定めた法を顧みず，一時的なものであるかもしれないのですが，その幸福のために戦争を起しています。251 神はすべての正邪の原因はよく御存知です。聖職者が戦いのために使うような法が，施行されています。聖職者はその本分ともいうべき愛の心をもって，この不幸な世を改めることができるのか私にはわかりません。260 しかし，人のもつ本性を考えてみますと，神の国は遠く，この世はまさに現実にあるとおりです。貪欲をその召使いとしている虚栄心は狡猾でありますので，自分の手にしうる物以外には関心を示しません。このようにして，教会が係る戦争が始まり，十分の一税(2)が戦争のために使われます。まるで戦争によらなくては，聖職者はその本務を果せないようです。272 教会の鍵は剣の方へと廻り，祈りは呪いとなっています。信仰を持ち，戦争の害を耳にする人々は，このような戦争に驚きます。278 世の中を癒すべき者が今では害悪となり，特に聖職者から忍耐をなくしております。これは聖職者が顔に怒

りの表情を現わしている所では，どこでもみられます。しかし，グレゴリーの本[(3)]にありますように，もし私達が彼のことばを信じるなら，高位聖職者に神不在の原因がある程度わかります。すべてのものは作られたままであるか，又は変化をするかどちらかです。牧師補の代理又は助手の名を持つ者がそれを誇るためでなく，ただキリストへの愛のために，高い地位に就きたいと思うなら，彼が良心に従ってとった行動のため，教会に利益が当然もたらされます。しかし，世俗の物に心を奪われ，貧困から逃れ，豊かになろうという理由で，高い地位を受け，喜ぶ者がいます。304 虚栄と富のために，学者やパリサイ人はモーゼのような指導者の地位に就くことを望みます。守るべき教義は時々顧みられません。310 キリストのこととなれば終日彼らは眠りますが，世俗のことは何一つ忘れることはありません。宮廷で地位につき，名誉が与えられている者は幸福に満ちています。314 貪欲のもとで立派な倉は，禄という宝物を腹いっぱいためこんでいます。それは当然貧しい人々に分け与えられるべき衣類，食料，住居なのです。慈悲の心は忘れ去られ，彼らは哀れみの種をもまきません。怠惰は教会に続く書庫の中に見られます。彼らは世俗のことにはたいそう関心をもっております。美食が彼らの口を満足させておりますので，節制はもはやみられません。328 さらに，エトナ山[(4)]が聖職者の心の中で爆発した時，彼らの間で意見が分れました。アビニオンでのこの経験[(5)]はよく知られています。問題が解決されない時，諺にもありますように，二つの椅子の間に座ろうとする者は転び，苦しみを味わいます。教会における分裂は私達にとって悲しむべきことです。真実のある側に神が味方されることを祈ります。342 しかし，よくみられますように，怠惰な人は酒におぼれてしまうと，ますますひどい怠惰となります。丁度，炎を消さなければ大火となるようなものです。嫉妬が引き起こす分裂，分派についていいますと，それが新しいロラルディーという宗派を起させ，そして聖職者の間に多くの異説を起す原因となります。362 聖書に書かれてあることをすべて知りながら，ある聖職者のするような誤りを犯しているよりは，土を堀り，耕して，正しい信仰の上に立つ方が良いことです。356 手に靴をはき，足に手袋をすることは，理性ある人の態度ではなく，立派な行動ではありません。もしキリストがこの地上で説かれた徳を考えるような人，そのような賢明な人なら，いろいろな土地のもつ傾向により左右される選挙により，教皇制の本質を歪めることは望まないでしょう。神の意志なら，それはなくすべきです。そして，真実が最後まで残りますす。370 しかし，教皇とその地位については大きな論争が起り，いろいろと話されております。肯定する者もいれば，否定する者もいます。このようにして，聖職者達は各々，この世を良くすることには関心を持たず，国民の利益となることには心を向けようとはしません。378 彼らは，神は全能であり，神が自分の望まれるように決定されるのだと言い，信仰の危機となるようなことには何もふれることはなく，すべての聖職者は特に世俗的なものに心をひかれ，教会のもつ普遍的な教えについて，誰も守ろうとする者はいません。このように正しい教えは守られず，彼らは自分達の好きな物

を手にすると言っています。[390]教会という，羊の群れを入れる檻はこわされ，導く者のいない群は世俗的なことに心を動かされる愚かな羊飼いの過失のために，あちらこちらで夢中で貪り食べています。[396]羊飼い達は救いによるのではなく，今や鋭い棒を使い，癒すべき足を傷つけます。どのような羊にもその背には多くの毛がありますが，彼らはそれを刈り，奪います。そしてまた，奪うべきものが他にもあります。彼らには，ただ手に入れたいと思う以外には理由はありません。しかし一度始めますと，それをやめずに続けます。それは良い羊飼いの行動ではありません。[407]このことについて聞いたことですが，彼らは広々とした草地から，いばらのある所へ羊を連れて行きます。といいますのは，羊飼いはそのように羊をひどく扱い，いばらに羊を引掛けさせ，とげに残った毛を自分のものとします。このように羊は傷つけられ，羊飼いのために羊はその毛を失ないます。[416]このように，彼らはチョークをチーズと偽ります。といいますのは，彼らは良いことを話し，教えておりますが，彼ら自身はその教えを守っていません。もし狼が現われたとしても，彼らは群を守るべき棒を武器として持っておりません。[422]しかし，もし哀れな羊が，たとえ小さな罪であっても罪を犯しますと，彼らはその羊を打ちます。彼らはどのような弁解をしても，小さな羊なら打ちますが，大きな羊を打つ勇気はありません。このように，[429]聖職者達は法を口にしていますが，人々が誤り導びかれているのがわかります。しかし，私はこれが普通のことであると言っているのではありません。心に徳が住んでいる聖職者たちがいます。彼らは使徒が語るように，神に選ばれ，アロンが完全な人と呼ばれたように，彼らも完全な人と呼ばれております。彼らは羊の檻の門を去って，別の門に入って行ったシモンのような人でなく，正しい道を歩んでおります。[441]シモンの後をついて行く聖職者も又いると言われています。シモンの荷車は貪欲と傲慢という車輪がついております。そして，教会はその傍を，心にないものを顔に表わしついて行きます。[449]もしその教会の中を覗いてみますと，彼らのことばとその行動との間には大きな違いがあることがわかります。彼らはそのことばを聞いている私達に，誰も自分の生命を粗末にしてはいけないと言い，又，この世の喜びは単に桜の園であると言います。そして，罪が当然の報いを受ける地獄がありますので，悪行を避け，善行を行うようにと命じます。[460]彼らのことばを聞くすべての人々には，彼らが手本となっているように思えますが，まじめにしましても，冗談にしましても，彼らのことばは彼らの行動でないことがよくあります。[464]彼らは聖なる物語を例にして，貧しい人々に衣服や食べ物を与え，この世の富を分ける，このような愛に満ちた行動がいかに立派なことであるかを語りますが，彼らは自分の持っている物を分ち与えることはしません。そのようなことを考えたこともありません。[470]罪の償いとなる苦行と節制を行い，禁欲と貞節を守ることは良いことであると彼らは言っていますが，卒直に言いますと，彼らは贅沢な食事をいつもし，そして，柔らかな寝床に眠る彼らのこえた肉体が，他のすべてのことを自由に行なえる時，彼らには貞節を保つことができないとは私には思えません。

479 しかし，私は間違ったことを口にするかもしれませんので，これ以上のことは言わないでおきます。481 私はこのようなことについて聞いておりますが，その事情がどのようなものであれ，私には何ら関係はありませんので，もう考えないでおこうと思います。最初に月を創られた方，全能である神は完全でおられますので，もし原因を見つけられましたなら，改革をなさることでしょう。487 誰が何と責めようとも，理性を持ち，真実である者は反論することができます。悪を行う人は善を行う人を非難することはできません。すべての人々は良い行動をするべきです。聖職者については，良い者は誉められるべきであり，そうでない者は良き者となるべきです。といいますのは，聖職者は世間の目に対し手本となるべき鏡であり，彼ら自身が規則であり，神と人との媒介となるべきだからです。

499 さて，民衆のことについて言いますと，いろいろな所で起ったあの運命は恐るべきことです。よくあることですが，樽のたがが破損しているため，発酵してくると，それと気づかないうちに，突然樽が粉みじんにこわれ，樽の中のものがあたりに流れ出します。普通は流れ出たりしないものです。又，よくあることですが，土手の小さな裂け目が，人々の気がつかないうちに，川の水を漏らします。その水の漏れをとめようとするなら，たいそう苦労のいることです。511 法律がない所ではまちがいが生じます。このことを信じない人は賢明な人ではありません。といいますのは，このことは以前に何度も証明されております。人々の住む所にはどこにでも騒ぎはあります。人々が不平をこぼす時，彼らは世界は悪くなってしまったと言います。すべての人はいろいろなふうに自分の意見を述べます。520 しかし，自己を顧み，良心を持つ人は最初から自分の信じる神を非難しません。そして，神はいつも変ることはありません。神を非難するべきではありません。非難されるべきは私達です。十人，十二人ではなくすべての人が非難されるべきです。といいますのは，事件が生じますと，その責任は人にあるからです。

529 さらに，運命が咎められるべきであると言う人々がいますし，又，行動を起すその原因となるのは星位にあるという意見を持っている人々もいます。どちらが本当かはわかりません。世間の人々はその本質からして，真実を知りませんし，見えない時のように，その判断は適切なものではありません。世間の人々は非難すべきものを非難しませんし，誉め称えるべきものを誉め称えません。540 このように世間は物の目方を計らねばならない時，その計りには狂いがあり，私達に食い違いがおこります。私達はそれに気づくべきです。私達に浮き沈みがあるように，世界にも浮き沈みがあります。そして，人が幸福と不幸の原因を作っています。548 私達が運命とよぶものは，その人自身から生じます。このように考えることができない人は，イスラエルの人々を見てみなさい。彼らイスラエルの民が良い行いをしていますと，運命の女神が彼らに微笑み，彼らが悪い行いをしますと，運命の女神はよそを向きます。556 世間の人々は不思議なことに，物が十分あるように思っているのですが，いつまでも豊かではないことをこのことは良く説明しています。すべて世俗のことは

むなしいものです。運命の車輪は常に廻り，そして，人がいつも頼るべきものはありません。運命の車輪はじっと止まることはなく，そこには人の意志は入りこむことができません。私達の知る限り，時以外存続するものはありません。世界には絶えず争いがあり，地位は安全でないかもしれません。この世は至る所で，さまざまに変化してきましたし，今も変化をし，将来も変化するでしょう。このことについて，特に私は聖書に一つの信頼すべき物語を見い出すことができます。この物語によりますと，この世のものが世界の終りまで存在しないその理由を，争いにあるとしています。すべての物が神に支配されて以来今日まで，どのようなことが起ろうとも，この地上で起ることに対し人にその責任があります。人はその行動により，世界に不幸をもたらしています。人が正しくこの世を治めることにより，世界の幸福をもたらすことができます。

全能の神はこの世を創られて以来，すべてのものを心に覚えておられますが，これから申しますように，ダニエルに予言を言われ，この世は変り，ついには終りがくると言っておられます。このことについての物語をしましょう。

ネブカドネザル(6)が眠っていた時，彼は夢を見ましたが，朝起きるまでそれを口にしませんでした。彼はその夢を恐れていたからです。彼はダニエルに自分の見た夢のことを述べ，その夢が何を意味するのか丁寧に説明を求め，次のように語りました。「私が寝床で眠っておりますと，不思議な，今まで見たことのないような像を，舞台の上に見ました。頭とその首はすべてすばらしい黄金でできていました。胸，肩，両腕はすべて銀でしたが，腹部からひざまでずっと青銅でできていました。すねは鉄でできており，足の一部も鉄でできていましたが，他の部分は人が壺を作る土からできていました。脆い物と硬く強い物とでできていましたので，それは長くはもちませんでした。といいますのは，その時私は，山の高い所から大きな石が偶然にも，突然その像の上に落ち，その石のため，金，銀，土，鉄，真鍮は細かく，粉々に毀れ，何ら価値のない物になったのを見たように思えました。」

これが彼の見た夢でした。ダニエルはその夢についてすぐ説明し，その異様な像は世界が今後変化をし，そして，ますます価値のないものとなり，遂には破滅することを示しているのだとネブカドネザルに言いました。ダニエルは黄金でできた首と頭は，今後現われることがないような価値のある，高貴で，豊かな世界を示すものであると説明しました。それ以外にある銀は，価値の低い世界を示すものであり，その後の真鍮の腹部は悪くなった世界を示すものです。彼がその後に見た鉄は，更に堅固な世界を示しますが，なかでも最も悪いのは最後のものです。彼が土と鉄でできた足が分裂したのを見た時，それは不幸を示していました。世界が分裂するとそれは必ず崩壊します。土とまじりあっている鉄は永く存在しません。そして，一方が他方を壊しますと，ますます早く破壊していくのは当然だからです。石が高い山からこの像に落ち，像を粉々に毀したというネブカドネザルの

夢をダニエルは説明し，人々が真直ぐに立っていようと思う時，その人々を倒す神の力について語りました。[658]そして，それはこの世の終りであり，それから新しい世界が生じます。その新しい世界から人類は離れることなく，苦しみか安らぎかどちらかがいつまでもあると説明しました。

[663]ダニエルはこのように，バビロンの町の王が見た夢をはっきりと説明しました。その町に住んでいたカルデア人の最も賢明な者でも，その夢の意味がわかりませんでした。ダニエルはその夢の一部始終を説明しました。[670]最初の黄金の世界はバビロンの王の時代であり，長く続きました。その時は，すべての諸候が王に従い，王はその地位についていましたが，遂に世界が変りました。それはペルシャの王シルスが息子のカムビシスと共に，バビロンの王に背き，自分達の望みどおり，バビロンを支配下におき，占領し，そして，バルザール王は殺され，その国とすべての財産が失なわれた時でした。[687]このようにして彼らがバビロンを勝ち取った時，黄金の世界が消滅し，銀の世界が始まりました。ペルシャ王国はダリウス王の時代まで続きました。その後アレキサンダー王が支配するという事態が生じました。彼は部下を引連れ，多くの驚くべきことを行いました。彼はギリシャへ渡りました。ギリシャ人の地位はよくなりました。ペルシャ人は征服され，当然苦しみを味わいました。[699]この時，銀の時代は去り，真鍮の世界が始まりました。この時代は暫く続きましたが，遂にアレキサンダー王は時機が来て，死の力に屈しました。[705]王は死ぬ前に，彼に仕えた諸候に国を分けることを定め，その功績に従って，王が勝ち取った領地を彼らに分けました。その領地を得た者の間で，彼らの心を支配していた傲慢な妬みのために，争いが生じました。遂に，当時ローマの王であった誉れ高いジュリアス・シーザーが強力な軍隊を引き連れ，激しい戦いで勝利を収め，ギリシャ，ペルシャ，そしてカルデアをも支配しました。彼は東方の地だけでなく，西方の地をもその帝国の支配下におき，彼は全世界の王となり，世界を支配する君主となりました。彼は皇帝という名誉を得た最初の者でありました。

[727]ローマが攻撃を仕掛けると，戦いをする者はなく，すべての国が彼に服従しました。真鍮の時代は過ぎ去り，鉄の世界が運命の車輪の上に高くのって訪れてきました。[733]鉄は人類が見い出した金属の中では一番堅いように，その当時ローマは最も強い帝国であり，長く存在しました。しかし遂にはローマ市民は堕落し，罪深い皇帝レオ[(7)]は，コンスタンティヌス一世がその慈悲の心からシルウェステルに残した教会財産[(8)]を，息子のコンスタンティンと共に教会から奪い取りました。[745]アドリアン教皇はこの不幸なできごとを見て，フランスへ訴えに行き，立派なシャールメイン大帝にキリストのため，魂の救いのために，聖なる教会を守る戦いを求めました。[(9)] [752]神に対し敬虔な気持を持っているシャールメイン大帝はその申し出を受け入れ，軍勢を連れ，ロンバルディーの山を越え進軍しました。剣を血で染め，ローマの暴徒を打ち倒し，ローマを力で手に入れました。このように彼は武勲をた

て，聖なる教会に再び特権を与え，教皇の失なったものを取り戻し，それ以上のもの[10]を教皇に与えました。このように彼は神に仕えましたので，当然のことですが，王冠を与えられ，王位につきました。766ローマ帝国は征服され，ローマの支配権は再びローマ市民の手に入ることはなく，長い間ローマはフランク王の意のままになりました。その後運命の女神がその車を廻して，ロンバルジア人が剣によらないで，チャールス・カルバスという名のその時のフランス王の同意によりローマ帝国を手に入れました。カルバスは同じロンバルジア人であった従兄弟のルイスに，ローマ帝国を譲り渡しました。779その状態はアルバートとベレンジャーの時代まで続きましたが，結局彼らは争いを起し，立派であった彼ら二人は不和となり，名誉と世界の平和を失いました。786諺にもありますように，富は失なわれずに，いつまでもその状態を維持することはめったにありません。これはロンバルジア人の場合にみられました。アルバートとベレンジャーの争いは彼の心の中に生じた貪欲と嫉妬によるものでした。軍隊に命令を下すことができる者が町の内外で民衆を支配しました。市民の権利を守る者がなく，法による統治が不可能となり，ローマは分裂によって苦境に立たされ，その結果必然的に外国からの援助を求めました。

802イタリア[11]は分裂し，法が施行されませんでしたので，イタリア人はドイツから七人の王を選びました。その当時のドイツは七人の王により選挙により統治されていました。感謝の精神が欠けていましたので，ロンバルディア人はイタリアの支配を失い，ゲルマン人がそれを譲り受けました。ゲルマン人は自分達の地位を強めるために，自分達の間で一致した意見は守り，争っている国があれば，それを自分達のものにしました。やがて彼らは，年代記にありますように，オットーという名の者を皇帝にし，その時から今日まで神聖ローマ帝国[12]はゲルマン人の手の中にありましたし，今日もそうです。821このように，ネブカドネザルが夢で見た像はその後の世界であるというダニエルの説明からわかりますように，予言の最後のことばが今現実に現われています。この世界は今，分裂した状態となって，土と鉄の足で立っています。これはローマが分裂しはじめた時に始まります。このような状態は残念なことです。といいますのは，それ以後世界はますます，日毎に悪くなっております。834私達がまず第一にローマを見れば，ネブカドネザルの夢が真実であることがわかります。ローマの城壁や市内は破壊し，崩壊し，宮殿のあった場所は野原となり，町は荒地となり，更にもし私達がローマの戦士，市民のことを考え，そして，現在のローマの力を過去と比べてみますと，もみがらはかつては小麦でありました。ローマは以前のように，栄光も世界の富ももっていません。849栄光の去った原因は，もし真実を語るなら，分裂にあります。分裂がある所では，分裂は時の支配を受けているものだけにあるのではなく，魂をも混乱させる母親です。856いろいろなできごとにより，このことが真実であることが証明されています。そして，世俗的なものの持つ毒が聖なる教会の中に入り込むことによって，このことが今まで証明されています。キリスト自身が教えられたように，もし神と世

俗的なものの両方に仕えるのを避けるならば，神と共にこの世で生き，安らぎを得ることができます。キリストのこのことばには偽りはありません。すべての人々には明らかなことですので，このことについてさらに正確に述べ，語る必要はありません。今や世界は終りが近づき，ダニエルが説明したネブカドネザルの像の外観を呈しています。874 黄金，銀，真鍮の世界は過ぎ去り，けっして相容れることのない，土と鉄の不安定な古い足で立っています。それは分裂した物のように倒れるにちがいありません。

881 私達に世界の終りが訪れると，使徒は語っております。この世界を示しているあの像が殆ど倒れていることを私達は知っています。この世はかつては偉大でしたが，今や年が過ぎ，弱いものとなり，堕落し，不幸と災難に満ち，私が話してきた像のように分裂しています。892 人々にはわかるでしょうけれど，愛がないため国が分裂すると，必ず不幸が起ります。今日四方を見わましますと，この世は分裂し，戦争がキリスト教徒の間で至るところで起り，人々は復讐を誓っています。聖職者はいつも説教をし，慈悲の心に基づかない立派な行動はないと言いますが，恐ろしい戦争が立派だとされても，そこに愛があるとは私には思えません。905 戦争によるすべての不幸は，知識があり，理性的に判断できる人によって起ります。このことを示すために，例の像は獣でなく，人の姿をしています。910 最初人間はすべての生物を支配するように命じられましたが，その後この力はなくなりました。アダムが堕落すると，獣も堕落し，アダムが病気になると，獣も病気になりました。最初，太陽と月という天体は人の罪を怒って，隠れました。920 罪のために，上空のきれいな空気はしばしば汚れていましたし，今日でもたびたび汚れています。今や激しい風が吹いていますが，やがて静まるでしょう。時には晴れることもあり，時には曇ることもあります。戦争を引き起こす人間の罪は憎むべきものであることがわかります。929 万物の現象を見てみますと，地上の私達はすべて自然の状況に似ています。潮が満ち，そして引き，地上の物が枯れ，又芽を出し，木々は緑でおおわれ，又葉を落とし，楽しい夏の花が見られると，又激しい冬の雨があり，昼があると又夜がきます。すべての物は同じ状態を保ちません。光があれば，闇があります。そして，地上に起こることは，人間のもつ気質とその状態に影響を受けています。945 グレゴリーは彼の著『道徳』[13]の中で，特に人間はまさに小さな世界であると述べています。その理由を彼は，理性ある魂を持つ人は天使に似ており，感情は獣に似て，その成長は木のようであり，そして石のように存在するからであると説明しています。学者が述べていますように，人間はその本質からすると世界のようであり，この小さな世界の回転の調子がかわると，大きな世界も倒れます。959 大地，海，天空これらすべては人間に対する裁きを求め，戦いを挑んでおります。人間の世界が乱れますと，他のものも調和をなくします。私が述べましたように，人間がすべての不幸の原因であり，世界が分裂している原因でもあります。

967 福音書にもありますように，分裂はある家を別の家の上に位置させ，遂には国家は完全

に倒れます。すべての人々は，特に分裂が世界に破滅をもたらし，実際，この世の初めから常にそうであったことを知ることができます。974このことは人間について考えると，うまく示すことができます。人間はその本質が，冷いもの，熱いもの，湿ったもの，乾いたものが分裂してできていますので，死ぬべき運命にあります。人間にあるこれらの相反する要素が絶えず争いを起し，結局ある一つの要素が優勢になりますと，健康が奪われます。983しかしそうでなく，もし人間の体いろいろの要素でなく，ただ一つの要素からできていますと，調和があり，分裂は生じません。しかし，人間の体には分裂があり，生命は続くことなく，死にます。991人間の体には今述べました分裂以外にも，分裂があります。その分裂のために生命がある間，体内に争いがあります。すなわち，肉体と精神も又分裂しており，肉体の憎むものを魂は好みます。このような争いがあります。肉体と精神の争いには，弱い方が勝利を収めます。1002過去にもあり，現在起っていることを思い起す人は，エデンの園で初めて起った争いを悲しく思うにちがいありません。そこでの争いは何であったか，又その争いがどのような不幸をもたらしたかを人々は知っています。この争いが恐ろしい罪悪をもたらし，その大きな罪のために，地上の人々の間で分裂が生じ，そして神が洪水を起し，箱船に乗って助かったノアとその家族の者を除いて，世界をすべて滅ぼされたのです。1017そして，ニムロデは大胆にも高いバベルの塔を築こうという罪を犯しました。それはあたかも，神の力に対し戦いを挑むようなことでした。それゆえ神は，他人の考えを知ることができず，共に生活ができないようにという意図を持ち，地上のことばを分裂させられました。1026罪が原因となっているすべての行為はいつまでも続きません。罪はその本質からして分裂を生み出す母親であり，世界の終りを示すものです。1032世界の終りが近づくと，平和と平安がみられず，愛がなくなり，人々の間で憎しみが増すとキリストははっきりと語っておられます。このような兆候が現われますと，ダニエルが語ったように，突然石が落ち，それが世界を滅ぼします。その後死者は立ち上がると，喜びか，罰を受けるのですが，永久に滞まる所，すなわち，天国か地獄へ行きます。天には平和と平安がありますが，地獄には争いが満ちており，その争いは解決される日はありません。各人が互いに平安に暮し，兄弟のように愛しあうことは良いことです。そうすれば，富と心の安らぎが得られます。

1053心の安らぎをもたらすハープを持ち，それに合わせて上手に歌い，その調べにより獣をおとなしく，やさしくさせ，雌鹿と獅子を，狼と羊を，野兎と猟犬を共に平和に暮させたアリオン(14)のような人が今いることを神に祈ります。そして，アリオンの歌，羊飼いの声，そして，神の声を聞く地上の人にはすべて，平和がもたらされますように。人々は王のことばに従い，王も人々の意見を聞き，心が一つとなり，悲しみが去りますように。1070すべての人々が笑い合う時，それは楽しい調べとなり，アリオンのようにハープを奏ることができる人がいれば，人々が憎み合っている多くの場所に平和がもたらすために，彼らはたい

そう役に立ちます。争いが起りかけている時，そのような人以外何も役立たないと思います。1078 知恵が無謀を生み出し，理性が怒りに変りますと，節度が保たれず，この世に暴力がもたらされます。これは恐ろしい状態であり，人々に悲しみをもたらします。しかし，これは人々を待ちうけています。鋭い拍車が馬の脇腹をあまりにもひどく打ちますと，それによって悲しみが生れます。このようなことについてはもう述べないでおきましょう。このことは神以外誰も，思いのままにすることができませんので。

註

使用テキスト：Macaulay, G. C., ed. *The English Works of John Gower*. EETS, ES, 81—82. Oxford, 1900—1901；rep. 1957.

翻訳にあたって，*Confessio Amantis* trans. Terence Tiller. Baltimore：Penguin Books, 1963.

(1) 教会のこと。

(2) 教区民は教会維持のため毎年主に豊作物の十分の一を納めた。

(3) ローマ教皇グレゴリー一世（c 546—604）の著『牧者法規』（Liber regulae pas torlis）のこと。

(4) 「エトナ山が爆発する」とは「嫉妬にもえる」の意味。

(5) ローマとアビニオンで教皇がその権力を争ったこと。

(6) ダニエル書二章。

(7) 皇帝レオはビザンティン帝国皇帝レオ三世（c 680—741）その息子はコンスタンティヌ五世（718—775）。

(8) 「教会財産」とはいわゆる「コンスタンティヌスの寄進状」というもの。偽イシドルス法令集の中に含まれる文献で，ローマ皇帝コンスタンティヌス（277—337）が改宗の際，ローマ教皇シルウェステル一世（314—335存位）に感謝のしるしとして，ローマ，イタリア，西方諸地域の宗教上の裁治権だけでなく，統治権をも寄進したことを主張している。その製作年代は八世紀後半とされているので，後で偽造されたことは明白であるが，中世では一般に信じられていた。

(9) ここの記述には誤まりがある。
シャールメイン大帝（742又は743—814）が生まれる前にビザンティン皇帝レオ三世（c 680—741）は死んでいる。なお，シャールメイン大帝はローマ教皇アドリアン一世（772—795在位）から，ロンバード王デシデウスとそのローマの親派に対するため援助を要請されて，それを倒した後，774年にローマ入りし，又，アドリアン一世の後を次いだレオ三世（795—816在位）から，アドリアン一世の支持者からの攻撃に対抗するための援助の請求を受けた。その後レオ三世から800年12月23日「皇帝」の位を受けた。

(10) 教皇領のこと。

(11) 本文では Thempire of Rome とある。

(12) ここも本文では Thempire of Rome とある。

(13) ローマ教皇グレゴリー一世による。Moralia in Iob のこと。

(14) ヘロドトスが語った紀元前600年頃のギリシャのリュートの演奏家のこと。彼は地中海への旅の後，水夫達に財宝を奪れて，殺されかかった時，歌を歌う許可を乞うた。彼は許され，ライア（古代ギリシャの七弦の縦琴）を伴奏にして哀歌を歌った。そして海に身を投げたのだが，その歌に魅せられたいるかに助けられ，陸に運ばれた。その後水夫達は罰せられた。